

文 献 紹 介

大越勝秋編 和泉国条里制史料集（阪南大学資料叢書1）：地人書房，1978年，A5判 202頁，4,000円

宮座の歴史地理学的研究において、先駆的業績を重ねられている大越勝秋博士は、また先年『和泉国条里制史料集』をまとめられた。

編者はすでに、戦後間もない昭和29年の晩秋『和泉国条里制関係史料集』をまとめられている。本書はその後の編者の発見による新史料、さらに昭和38年夏の高野山総合調査の折に発見された同山勸学院の近本庄関係史料をはじめとして、多くの新史料も収録されている。こうして本書は、前刊の諸史料に加えて、京大古文書、久米田寺をはじめ、諸社寺、諸旧家、高野山などの史料が網羅された和泉国条里制史料の集大成版といえるものである。

まず、(1)写真・図としては、和泉国の条里遺制復原図(4地域)、条里呼称図、村絵図(南部の荒木村)、久米田寺文書写真(建武5年・1338年免田注文)、条里地割図(現泉大津市泉穴師神社付近)、空中写真(岸和田市)がみられる。(2)条里史料は本史料集の大部を占めるが、上記の諸所蔵家(23家)のものが109点にものぼる。さらに、(3)条里制坪名集として旧4郡全部(大島・和泉・南・日根諸郡)、それに、(4)郡別坪付型式も含められている。

次に、本史料集の価値と、その意義についてみたい。その内容は、上記のごとく(1)～(4)の部門に大別されているが、なかんずく、(1)写真・地図、(3)坪名集、(4)郡別坪型式の3者は、ともに条里制理解の基本であるので、本書上の提示は、極めて貴重である。ことに対象地域が五畿内に属していることも、本書のもつ意義をより重からしめている。

それらのうち、写真1—①～④は大島・和泉・南日根4郡の条里復原図で、坪名も記され、ことに①と②は鮮明で、条里分布と地形(ことに水系と沖積低地)との関係をより明瞭に知ることができ、資料的価値は大きい。条里呼称図は、条里の分布は上記の4図に比べてよりの確であり、条里の呼称については、数人の先学と意見が一致してみているもの29里についてその呼称も記入されていて、里の所在研究に益するところが大きい。そして、大和・石津・王子・大津・春木・津田・近木・見出・榎井・男里

諸川流域に分布が密であることも知られる。村絵図は、和泉国条里分布の中心地域たる「南郡」関係のもので、里とそれぞれの土地割がほぼ確実に知られ、一部水流(小河川)や微地形に基づく変形地区も示されている。

写真・図の末尾の泉大津市地割図は泉穴師神社付近のものであるが、その条里地割は千鳥式坪並であったことを知り得、また同神社北方から穴師池車方へかけた合計六坪分の地区には、神社境内地の拡張(?)や溜池(穴師池)の築造、また地形関係(?)による条里制初期区画の改変状況も表わされている。したがって、それらに史料による吟味を加えれば、それらの築造年代、そして水利の充実—農業集約化—の時代を明確ならしめ得る資料となり得よう。また19・21両坪間の「20池」は20坪を中心とした人工溜池である。その南に続く「堀田」は、坪並からは「29坪」にあたる地区であるが、とくに「堀田」としているのは、ある時期にこの部分を溜池としていたものをのちに埋め立ててしまったので、「堀田」の小字名として残されているのあろうか。とにかくこれらは、灌漑用水欠乏地域たる和泉国—瀬戸内気候地域における水利充実への対応が表われているものといえよう。

また、(3)坪名集も貴重である。これには、各市町村役場の土地台帳記載の小字名がすべて集録されているが、ほかに市町村の大字の実行組合関係の絵図・実測図・伝承、その他古記録から引いたものや、検地帳・名寄帳等の古記録に収蔵されているもの、また坪名は残っていないが、条里地名の比定上参考となる大字名も含められていることを指摘したい。

(4)郡別坪付型式からすると、大島郡は併行式、和泉・南・日根の3郡は千鳥式となっている。

さらに本史料集には、上述の基本的型式資料に加え、109点にものぼる条里史料が収められている。それは、広く条里制の変貌過程把握の根本資料をなすものであり、本史料集の有意義性を、より一層高らしめるものである。

それを年代的にみると、8世紀中葉(天平感宝1年)の流記坪付帳を最古とし、戦国末(天正11年)の田地売券にいたる834年間にわたっている。これらの時代別の史料内容をみると、奈良～平安前期で

は流記坪付帳（流記帳）のごとき条里制の基本資料であるが、平安末から鎌倉期へかけては寄進状・売券が出始め、南北朝期にもこの両者が圧倒的に多く、検注免田等取帳・免田坪付の基本資料はわずかである。南北朝合一期後は期間も短く、史料数も多いとはいえない。しかも、寄進状は少ないのに対し、売券の多いのが目立つ。また、この期にみられる近本庄関係資料には、基本資料（上番馬上取帳その他）がみられる。応仁・文明の大乱後から戦国期へかけては、寄進状・売券がほとんどで、基本資料（内検帳・名田数之事等）はわずかである。このように、109点にものぼる史料については、限りなく多くの視点からの活用法があることであろう。

こうして、編者の多年にわたる精力的探訪の累積によってなった本条里制史料集は、その利用価値が際限なく拡大され、関係諸学の研究の深化・発展に大きく寄与されることとなるのである。ここに、その内容の一端を紹介し、編者の多年の研鑽に改めて敬意を表するものである。（浅香幸雄・専修大）

侯仁之著 歴史地理学の理論と実践：上海人民出版社，1979年，A 4判 463頁，2.20人民元

中華人民共和国成立後、中国における歴史地理学関係のまとまった書物として、管見の限りでは最初のものである。この書は、北京大学教授の著者が20年来発表してきた論文を、一冊に編集したものである。内容は歴史地理学の理論探討、沙漠の歴史地理学的考察、都市の歴史地理研究、其の他の4部構成である。以下、簡略に内容を紹介してみよう。

歴史地理学の理論探討では、歴史地理学の理論と研究法が述べられる。まず、歴史地理学の課題は、歴史時期における主要な人間活動により生じた、あるいは影響を受けた全ての地理的变化の解明であり、その研究対象によって、歴史自然地理と歴史経済地理があるとする。次に、過去を分析することによって現在は理解でき、復原することによって過去は把握でき、そして歴史地理学としては、現在を形成するに至るまでの変化の法則を把握することが必要であるとする。

中国地理学の伝統の一つである沿革地理と歴史地理との関係について、前者は従来、歴史学によって重んじられてきたが、歴史地理学はあくまでも歴史時期の地理本体が対象であり、沿革地理は究明の初歩の段階ではあっても、最終目的ではないとする。

また、歴史地理学と、いわゆる唯物主義と唯心主義との対立については、生産関係の変化に伴い地理は変化するから、社会階級が存在を考慮しない唯心主義は適切でないと述べる。

沙漠の歴史地理学的考察の部では、国土の相当部分を占める沙漠は、国家建設と中国革命実践のための自然改造の対象として重要であり、この沙漠の改造と利用に直結するものとして、沙漠の歴史地理学的考察の意義がまず述べられる。そして、主として考古地理的視点から、西北部の沙漠中に大量に埋没している遺跡を発掘することによって、歴史時代の沙漠の変化を探究するという問題意識に立って、内蒙古自治区紅柳河上の古城の廃墟から、オルドス高原南部の沙漠の変遷が考察されている。古城の復原及び付近の湖沼の消失現象を、『水経注』や『元和郡県志』等の史料で検討を加えながらも、その正確な比定は考古学の復原をまつしかないと指摘する。その他、寧夏回族自治区の沙漠の漢代における開発の状況について、考古学の発掘や実地調査、史料等を利用して、当時の自然環境とともに、古城、古道、古墳の詳細復原が行われている。多数の遺物や写真を利用して、考古地理的分析が十分になされている。

都市の歴史地理研究では、まず古代の北京、元の大都、明清の北京城に関して、都城に関する史料や考古学的調査によって都城の形態、都市水利についてふれ、続いて宮城の改造及び天安門広場の宮廷広場から人民広場への改造について、景観変遷に重点をおいて考察している。宮城と広場は、支配階級の専制的支配の象徴的構築物であるとし、その現代における改造に意義を見出している。また、都市水利に関する論文とし、北京城の都市化に関与した地形・水源・水系の利用の変遷が、特に水源問題に焦点が当てられて述べられている。その他、都市では山西省の邯鄲、山東省の淄博、河北省の承徳の起源・人口・都市化の要因についてふれている。

第4部では、ヨーロッパ勢力の新航路発見以前に中国と南・西アジア、東アフリカとの交通路を開拓した鄭和の遠征、ヨーロッパの唯物主義的地理学者の代表としてのフンボルト、及び明代の地理学者・徐霞客の評伝が収められている。

多くの論文に共通することとして、考古地理的復原の精密さがまずあげられる。綿密なるフィールドワークに基づき、史籍と接合させた復原の手法が随